

河岸空間と周辺コミュニティとの関係性に関する研究 —Varanasi (INDIA) における Dev Diwali 祭—

1. 研究の背景と目的

20 世紀後半以降の開発による環境破壊は、人間の存在と環境の間に無視することのできない不適合を発生させた。この状況は未だ解消されていない。このような原因として、国やその土地などによって、環境保全の概念や、環境に対する意見が異なることが考えられる。そのような状況の中で、「地域環境再生のためのオ - ルタナティブ (alternative) な手法としての手法、仕掛け、制度づくり、理念をどう構築するか」¹という課題がみえてくる。その課題に対し近藤は「人間と環境との相互作用の中で得られる環境との上手なかかわり方を可能とする能力」としての「環境的スキル (environmental skill)」²の必要性をあげている。また鳥越は日本民俗学の祖「柳田国男」の環境観を例にあげて、環境民俗学の視点として人間と環境の間に「現代的にリフォームして使用できる内包された知恵」というものをあげている³。つまり、これは伝統的社会に存在した「民俗の智」⁴ともいうべき物への視線が、いまオルタナティブな方法の一つとして必要とされている。

また近年、混沌、有機的といった表現がなされるアジア都市には、古からの独自の環境観に基づいた、陰陽や風水に代表されるコスモロジーによる、エコロジーの思想が環境文化として内在していた。そして「宗教上の祭礼や儀式がしばしば都市空間の水と密接に結びつく」⁵。すなわちアジアの都市が内包する水と人との関係を、宗教をというフィルターを通して、「掘り起こす」ことが鳥越の言う「現代へのリフォーム」を行うことの第一段階に

他ならない。

そこで本研究では、3000 年の歴史を持ち、ヒンドゥー教の聖地として、宗教と水との密接な関係がみられる、インドの「ヴァラナシ (Varanasi)」を研究対象地とする。そして河岸空間と周辺コミュニティの関係性という視点にたち、Dev Diwali 祭という祭を通じて、環境と人間を結びつける役割を果たすものを「伝統的仕掛け」とし、意味付けの拡張がみられる部分を「現代的仕掛け」と位置付け、環境と人間の関係性を「現代にリフォーム」する方法を模索することが目的である。

2. 研究対象の概要

2 - 1 聖都「ヴァラナシ (Varanasi)」

インド国内外から観光客、巡礼者の集まるインド七聖地の中でも最大の聖地。

2 - 2 河岸空間「ガート (ghat)」

聖川ガンジス川の河岸 6.4 km に設けられた階段状の施設。ヒンディー教の聖地の原初的形態。沐浴で有名。

2 - 3 周辺コミュニティ「モハッラ (mohalla)」

ヴァラナシ最小の社会組織、地域コミュニティの総称。本研究では、ガートに隣接するものを周辺コミュニティとする。

2 - 4 祭「Dev Diwali 祭」

オイルランプをガートに飾り付ける祭。元来は、ヒンドゥー暦のカルティカ (Karttika) 月の満月 (Purnima) にパンチャガンガーガートで行われていた小さな祭で、10 年程前から大規模になり、現在はヴァラナシ最大の祭の一つ。

3. 日常における河岸空間と周辺コミュニティの関係性

日常における社会構造の主体の一つである住民の日常行動について、2000,2001 年にを行ったヒアリングデータを基に分析を行う。

3-1 分析の手順

モハッラの構成要素と、それが住民に与える影響の分析

ガートでの住民の行動分析

3-2 調査地区



図1 ヒアリング調査地区

3-3 モハッラの構成について

ヒアリング調査地区（図1）においてモハッラの構成要素別にみた結果、モハッラは構成要素（ガート、住民の出身地、伝説的な建造物など）によって規定されていることが証明できた。またその構造からモハッラは以下の3タイプに集約できた。

1.街路型 2.シンボル型 3.シンボル・街路型

3-4 河岸空間での行動分析および考察

3-4-1 住民の使用するガート

ヒアリング結果から、モハッラの構成要素によって、使用するガートに特徴が伺えた。

その理由はガートの持つ特性のためであった。

その特性とは「ローカル」-「アンローカル」軸と「タイト」-「ルーズ」軸によって位置付

けることができた（図2）。

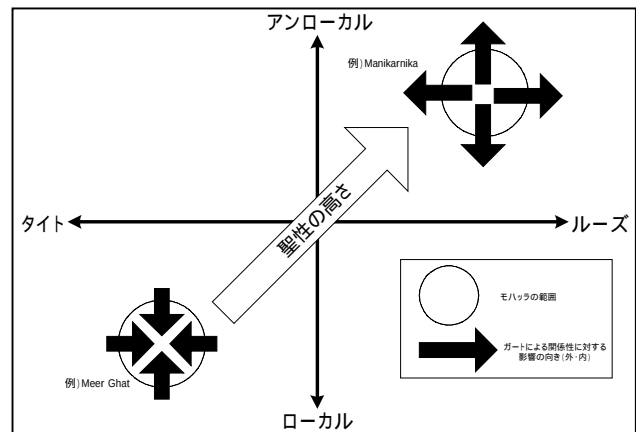


図2 ガートの概念的位置付け

3-4-2 行動における特性

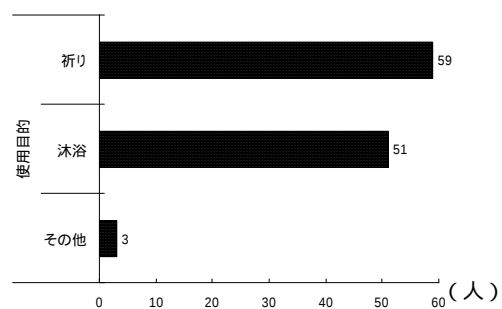


図3 日常、ガートで行われる行為

人々が日常にガートで行う行為は図3のグラフに示した通りである。

日常の行動にも、ヴァラナシの聖性が表象として現れていることがわかる。また、ガートに行く頻度約60%以上の人々が週に数日以上通っている。しかし、ガートで周辺モハッラの住民にとって日々の沐浴も日常の行動である結果でもある。

また図2で示した「ローカル」-「タイト」なガートでは厳密ではないが、日常、他地域の人々が利用するメリットが殆どないために、周辺モハッラに帰属している。

逆に「アンローカル」-「ルーズ」なガートでは他者の使用が非常に多いので、特定のモハッラに帰属というより、むしろヴァラナ

シの象徴という意味が強い。

4. 非日常におけるヴァラナシの社会構造

4-1 伝統的仕掛け

非日常的な時間と場所で一同に会し、同一性を会して共同性を再認識するための仕掛けである。

4-1-1 オイルランプの意味（イメージ）

オイルランプには「聖-浴」循環における、スイッチとしての役割。また、コスモロジーの共有を促す役割がある。

4-1-2 自己-他者認識による中間アイデンティティの確認

a) 「競い」の意識

84 のガートを飾り付ける行為によって生まれる「競い」の意識は自他の区別が現象化したものである。この意識で自己の帰属意識が高まる。より身近な集団（モハッラ）＝中間集団を認識する。

b) 公共私の変化

ガンジス川（公）、ガート（共）、モハッラ（私）という空間が、祭りの間は（私）空間の広がり「ガート＝モハッラ」という関係性を作り出す。モハッラの住人であるというアイデンティティを確認する。

4-1-3 「個」から「総」へアイデンティティの統合

自己-他者認識の過程での「競い」意識は上位レベル（形而上）で統合される。すなわち、ヴァラナシの住民であると感じる瞬間であり、アイデンティティが統合される。

その瞬間としてあげられるのが以下の二点。

オイルランプの点灯

オイルランプによってもたらされるヴァラ

ナシのコスモロジーという共有イメージのため劇的な情景。

観光客

観光客に見られるという意識への変化。「地元住民」-「観光客」という二項対立概念といえる。飾り付けを行う中間集団から、ヴァラナシの住民という総体へ変化する。

4-1-4 「伝統的仕掛け」のまとめ

「伝統的仕掛け」は「個」-「中間集団」-

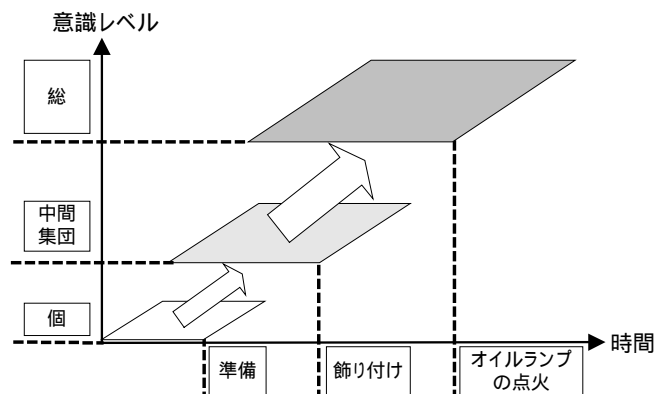


図4 重層化する意識レベル

「総」という各意識レベルが、時間と共にレベルアップする構造になっている。

4-2 現代的仕掛け

「ガンジス川をきれいにしよう」などのメッセージによって意味付けの拡張が促す仕掛けである。

4-2-1 仕掛ける主体について

サミティ（samiti）という自治（会）組織がモハッラ毎（2、3モハッラで一つの場合もある）に存在。「伝統的仕掛け」「現代的仕掛け」ともにオーガナイズする組織のこと。

4-2-2 サミティ、クラブの構造

サミティもしくはクラブは各ガートの代表である。この上部組織として「ケンドゥーリ Kendriya Dev Deepawali Maha Samiti」があり、

個人-サミティ-ケドゥーリというヒエラルキーからなる。



図5 各サミティの飾り付けの範囲及びガート

4-2-3 役割

Dev-Diwali 祭において、「伝統的仕掛け」によって統合される市民のアイデンティティに、環境意識を高めるための「現代的仕掛け」を仕掛ける。二つの仕掛けによって祭を成功させている。伝統的仕掛けによって確認される「宗教都市」としてのアイデンティティに、「環境美化」という新たな意識を加え、より強固なアイデンティティを作り出す。

4-3 Dev-Diwali 祭の構造のモデル

本来あった「ガート」-「モハッラ」-「ガンジス川」という関係性のもとに「伝統的仕掛け」によって、祭り本来の持つ性質を使い、地元意識の高め、「現代的仕掛け」によって結合する結合様式が、Dev Diwali 祭の構造である。

5. 結論

日常生活では、各ガートの利用など関係性是一对一であり、使い分けられる。それが、Dev Diwali 祭は住民による自治組織「サミティ」によって、「伝統的な仕掛け」は共通の飾り付けという行為によって、共通のコスモロ

ジーを感じさせる。しかし、それぞれの持つ意味のずれがあり、むしろ現象による「統一感」、外部視点的をもたらず（図6）。

しかし、「現代的仕掛け」による「環境美化」という新たな共通意識を促すことによって、内的視点的な意識も芽生えさせ、聖地性による「ガンジス川」-「ガート」-「住民」の関係性をより一層強固なもとする（図6）。

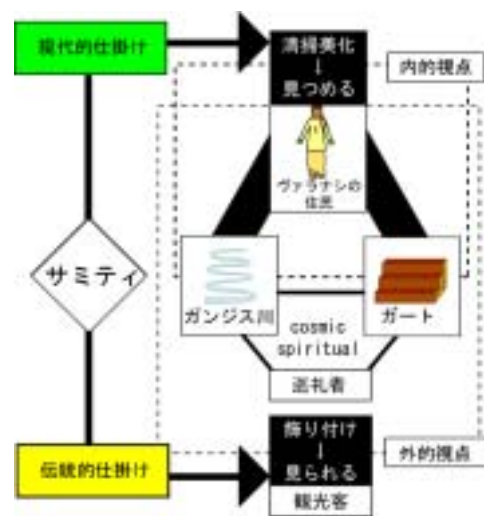


図6 Dev Diwali 祭の構図

つまり、Dev Diwali 祭は伝統的な祭のもつコスモロジーや環境と人間の関係性を掘り起こし「伝統的仕掛け」を仕掛け、そこに新たな「環境美化」という「現代的な仕掛け」を仕掛けることで日常の「河岸空間」と「周辺コミュニティ」の関係性を強固にする有機的な構造をもった「お祭り」である。

¹ 長谷川公一：特集 地域環境再生の社会学，環境社会科学研究，5，p4，環境社会学会（1999）

² 近藤隆二郎：環境イメージの発達過程にける役割行為の意義と効果に関する研究，p22，大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文（1994）

³ 鳥越皓之編：試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから，p31，雄山各出版（1993）

⁴ 鳥越皓之編：試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから，p31，雄山各出版（1993）

⁵ 陣内秀信：アジア都市理解のための着眼点，季刊 iichico winter，38，p4，日本ペリエールアートセンター（1996）